統合失調症患者における母子画の研究

—事例を通して—

南　里　裕　美
谷　　直　介

1．はじめに

母子画（Mother and Child Drawing）は、Gillespie（1989）によって考案された描画法である。母子画は、その理論的背景に対象関係論を掲げ、母子画を対象関係の観点から理解し解釈することを重要視している。Gillespieが述べる対象関係論とは「外的現実そのものではなく、体験によって色づけされた内的イメージを扱う」というものであるが、そもそも、外界とは区別される内的世界を重視し、その中の内的対象関係がわれわれのパーソナリティを規定していることを明確にしたのは、Klein, Mであった。Kleinやその後に続くBion, Wらは、われわれの心が最早期の外的内的「母子」関係を基に組織化されていくことを見出した。平井（2002）の言うように、対象関係論を含む精神分析そのものが、「母子関係を巡って進展してきた部分があり」、それは、単に「実際の母子関係を通じて人格が形成されるという意味ではなくて、早期の母子関係を通じて＜母子＞が心の中に内在化される」という過程がわれわれの心（内的世界あるいは人格と言ってもよいのかもしれないが）の発達には含まれているのではないかと考えられる。そして、平井はそれらの＜母子＞がわれわれの心の中に「重要なユニットとして」存在していると指摘している。ここで平井の言う＜母子＞とは、「子どもを育てるということ」、つまり、人の心の中に存在している“乳児的部分（赤ん坊や子どもの部分）”とそれらについて考える“親の心の状態”とをあらわしているといえる。Gillespieは、母子画には、内面化された自己や他者が投影されるということを強調しているが、そうだとするならば、前述したような個々人の心の中に内在化された＜母子＞という心のある一側面が、母子画には投影されると考えてよいのかもしれない。

Gillespieの母子画は、「お母さんと子どもの絵を描いてください」という教示で実施される。しかし、本研究では「赤ちゃんとそのお母さんの絵を描いてください」という教示で実施した。対象が精神病患者であり、「子ども」を「赤ちゃん」とすることで、彼らのより早期の＜母子＞の一側面を捉えたいと考えたからである。また、そうすることで、より個々人の心の中に存在する赤ん坊的な部分とそれらを抱える母親の部分という一側面を捉えることができるのではないかと考えるからである。

Gillespieは、描画法の数量的研究が難しいことを指摘しており、その著書の中で多数の事例を報告している。本研究でも、描画法の個別性を重視し、数量的研究を実施する前に、まず、統合失調症患者によって描かれた母子画がどのようなものであり、どのように臨床場面で活用できそうかということとどのような＜母子＞関係が投影されるのかを母子画の紹介を含めて探索することを目的とし、いくつかの事例を示したいと思う。

2．方法

1）対象

今回、紹介する母子画の対象者は、2003年～2005年の間に京都府下の精神科病院に入院しており、本研究の趣旨に同意の得られた患者６名（男性２名、女性４名）である。

2）施行法

八つ切りの画用紙と４Bの鉛筆及び消しゴム、24色の色鉛筆を用意し、患者に「この画用紙に赤ちゃんとその赤ちゃんのお母さんを描いて下さい」という教示を与える。色鉛筆の使用は自由である。描画が終わった後に、どのような場面をイメージして描いたのか、お母さんはどんなことを考えておりどんな気持ちなのか、赤ちゃんはどんな気持ちなのかという質問をし、それぞれに答えてもらった。

3．事例

以下に事例を提示する。

【事例１】

A、男性、10代

主訴：族につけねらわれている

診断：統合失調症

現病歴：進学に際して、突然泣き出すなど不安定。夜間不眠などを訴えるなどしていたが、追跡・注察妄想に関しては周囲には黙っていた。通学をし始めると、落ち着きがなくなり独語が生じる。母親は、患者出産時に、精神病による入院歴がある。

母子画（図１）：

描画施行時は、ボーっとした様子で、疎通がとりにくい印象があった。ただ、非常にゆっくりではあるが、こちらの言うことには確実に反応を示していた。母子画の教示後、「難しいな」と言いながらも描き始める。描かれた母親は

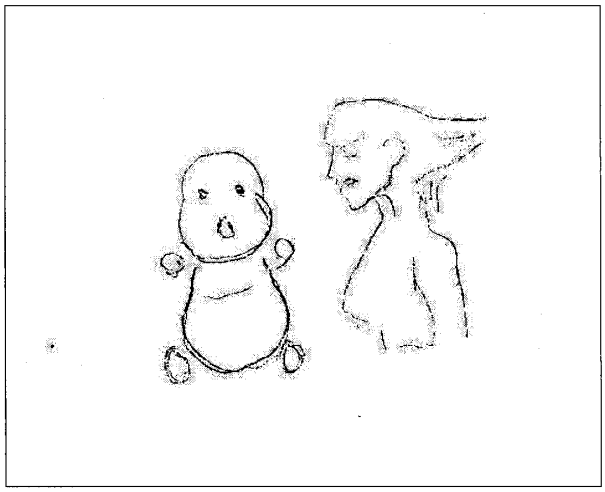

図１

「やさしいお母さん」なのだと言う。

Aは、描いた母親を「やさしい」と表現していたが、この絵から筆者が受けた印象は、鬼のように鋭い表情をし、赤ん坊に襲いかからんばかりの勢いのある母親とそれに驚愕する赤ん坊というものであった。Aの赤ん坊部分は迫害的な何かに襲われている。これは、この時Aが感じていた種類の不安に関連するものかもしれない。つまり、何か恐ろしいものに襲われているという病的体験と関連するものを母子画で表現しているのだろう。また、同時にAの最早期の母子関係の体験の一側面を表しているとも考えられた。Aの母親はAを出産時に精神病を発症したし、今回、Aが不安定になる前にも入院をしていた。Aは、母親を何か恐ろしいものとして経験し、怯えていたのかもしれない。それがAにとっての外界の体験でもあったのかもしれない。そして、同時に、Aは自分の中に存在する恐ろしい何か（精神病部分）に圧倒されているということを表現しているとも考えられる。

【事例２】

B、女性、40代

主訴：作家につきまとわれ、SEXをされる。お金を盗られる

診断：統合失調症

現病歴：10代で発症。お金のことなどでイライラし、近所の住人に暴行をしたりする。ある時、作家にファンレターを書き、それから、その作家が直接自分のところに会いに来たり、部屋に入ってきてSEXをするのだと言う。妊娠したということで、産婦人科に行って子宮を洗ってもらったりしている。それに加え、お金を盗られたと言い、きょうだいに預けるようになってきた。

母子画（図２）：

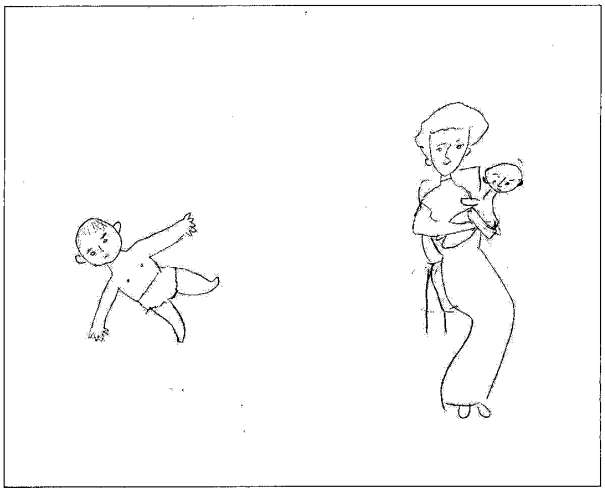

図２

教示後、まず左側に赤ちゃんを描き、その後「抱いているところ？」と検査者に確認し、自由に描いてよいことを伝えると、右側のスペースに赤ん坊を抱いた母親の絵を描いた。描画後、質問するとこの二人の赤ちゃんはお互いに関係はないのだという。そして、この母親は「やさしくて、子どもが好き」であり、「生まれたばかりの赤ちゃんを抱いている。子育てを楽しんでいる」のだと言う。赤ちゃんを二人描くという非常に珍しい母子画になっている。この絵は、どこか“排除される”あるいは“排除する”ということを含んでいるようにも思える（左側に描かれた赤ん坊）。そのことは、この人が集団（３者以上の関係）の中で生きていくことの難しさを表してもいるだろう。また、何を排除しあるいはされているのだろうか？左側に描かれた赤ん坊は、母親に抱かれている赤ん坊に比べ、描画にも歪みが少なく、丁寧に描かれている。この人の人格の比較的健康で歪みの少ない部分（左側の赤ん坊）が、歪んだ部分（右側の赤ん坊）にのっとられ、さげすまれ、排除されようとしているのかもしれない。

【事例３】

C、女性、30代

主訴：新しい生活への不適応

診断：非定型精神病

現病歴：20代の出産時に、幻視やドッペルゲンガーなどが出現したが、その後は安定していた。その数年後、非定型精神病発症し、以後入退院を繰り返す。退院後、入所した施設でルールが守れず、それがひどくなったため入院となる。

母子画（図３）：

図３

教示後、「難しい」と言いながら、赤ん坊から描き始める。その後、「他に何を描いたらいい？」との質問があり、教示を繰り返し伝えると、母親の絵を描いている途中で、「難しいわ」とつぶやく。赤ん坊は泣いていて、このお母さんは「優しい人」なのだと言う。この絵は、非常に大きな赤ん坊がむずかって泣いており、お母さんの抱っこからはみ出そうになっている。つまりここには、何かによって怒り悲しんでい

る彼女の赤ん坊の部分とそれを包容しきれない母親が描かれている。これは実際の現実状況で生じていることでもあるだろう。彼女の問題行動（ルールが守れない）の意味が理解されにくかったために、結局彼女は施設を出され入院となってしまった。そこでは、むずかる赤ん坊（問題行動を起こす）とその意味を理解しかねる母親が実演されているようでもある。また、彼女自身も自分の中に生じてくる怒りや悲しみの意味づけができないために、それらは問題行動となって表現されてしまう。結果、彼女は「扱いにくい赤ちゃん」であり、周囲も彼女の問題行動の意味を考えることができないということを繰り返してしまう。Cは、まず自分の中に生じる怒りや悲しみ（むずかり）を理解してくれる人（＝母親）を必要としているのかもしれない。

【事例４】

D、男性、60代

主訴：人が怖い、狙われている

診断：統合失調症

現病歴：高卒後、各地で職を転々とし、約10年後に実家に戻ってきて、以後自室に閉じこもるようになる。閉じこもりが始まり、最初は大人しかったが、そのうちにガラスを割ったり、モノを投げたり、独語空笑がみられるようになる。入院前には完全に引きこもり状態となり、昼夜逆転の生活となる。また、母親に暴力を振るうようになる。今回の母子画は、入院して10数年経ってから描いてもらったものである。

母子画（図４）：

教示後、「動物でもいいですか？」との質問があり、＜自由に＞と答えると、コアラの親子を描く。もっと毛がふさふさとしているのだという。描画後、そのコアラの親子についての説明を求めると、次のように話す。「赤ちゃんはお母さんにしがみついておぶってもらっている。

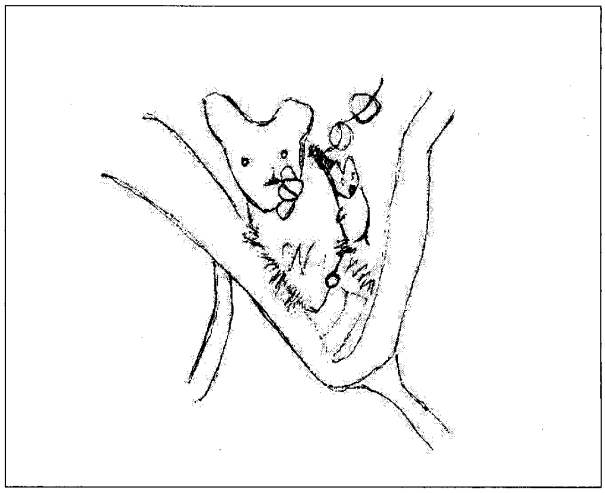

図４

ついていけば、何かいいものがもらえるんじゃないかと。食べ物とか」。そして、コアラは母親がユーカリを食べ、その糞を赤ちゃんにあげるのだと教えてくれ、最後に「人間では考えられないが」と付け加える。動物の親子はかなり珍しいと言える。Dは、こういったふさふさの毛に連想されるような暖かみや安心感を求めているといえるのかもしれないし、長い入院生活の中で、Dはより動物的な心の状態にまで退行してしまっているとも考えられる。＜母子＞の観点から考えると、ここで描かれている赤ちゃんは、何かをよいものを期待し、そしてしがみついている。Dの心の中には何かよいものを期待する部分が存在しているようではあるが、ただここでは何も与えられてはいない。Dは、母親の持つ機能として、赤ちゃんが消化できないものをまず母親自身が消化し、それを赤ちゃんに与えることがあるということに気づいているようであるが、最後に「人間では考えられないが」と付け加えているように、母親が持つそのような機能を自分は体験したり、また、手に入れることができないというふうに感じている側面があるのではないかと推測される。

【事例５】

E、女性、50代

主訴：周囲の雰囲気が変わった

診断：統合失調症

現病歴：10代前半に発症。通信販売で物品を購入したが、その代金を払い忘れて通信販売の会社から抗議の電話を受けた。その頃から、「周りの人が警察に見える」、「周囲の雰囲気が変わった」と言い出し、精神科受診し、入院。幼少時より、自家中毒が多かった。今回の母子画は、入院から20数年経ってから描いてもらったものである。

母子画（図5）：

図5

描画後、まず母親のことについて問うと「偽のお母さん」と言い、“うそのお母さんにおどろき赤ちゃん”と文字を書き込む。そして、「赤ちゃんは怖がっている」と言う。それから、「おたづね…」とまず書き込み、＜この母親はおたずねもののような怖い存在？＞とたずねると「そう」と答え「退度」と書き込む。これについては意味は分からない。笑いながら赤ちゃんの足を触って「変」と言う。

Eの描画能力も高いが、非常に興味深い絵である。まず、Eが言うのにはこの母親は“うそのお母さん”であり、描画を見ると笑顔ではあるがナイフのように鋭い指を持ち、赤ちゃんに近づいて行っている。これは、自分を助け世話をしてくれるはずのやさしい対象に、傷つけられるかもしれないというEの恐れを表わしているのではないかと思われる。Eが幼少時、自家中毒症に悩まされていたことを考え合わせると、母親のくれるおっぱい（食べ物）に毒が含まれているかもしれないとの空想を強めたとも予想することができるし、Eにとってそのことは一見やさしくみえる母親に、鋭い爪によって傷つけられていると体験されていたのかもしれない。実際、Eはこの描画を深緑の色鉛筆で描いたのだが、赤ちゃんの手足を深緑で塗りつぶし、描画中に「毒」だと言っていた。そうなってくると、何が本物で何が偽物なのか、自分にとって何がよいものであるか悪いものであるのか、何が助けてくれるものでそうではないのかなどが曖昧になってしまっている側面があるかもしれない。Eを助けてくれるはずのもの（病棟が提供する世話や治療など）が、Eにとっては攻撃とか悪いものとして受け取られることもあるのかもしれないし、自分は治療を受けることで毒されていると感じているところもあるのかもしれない。

【事例6】

F、女性、20代

主訴：私が周囲に影響を与えている。（自分が）にやけると人が幸せになり腹が立つ

診断：統合失調症

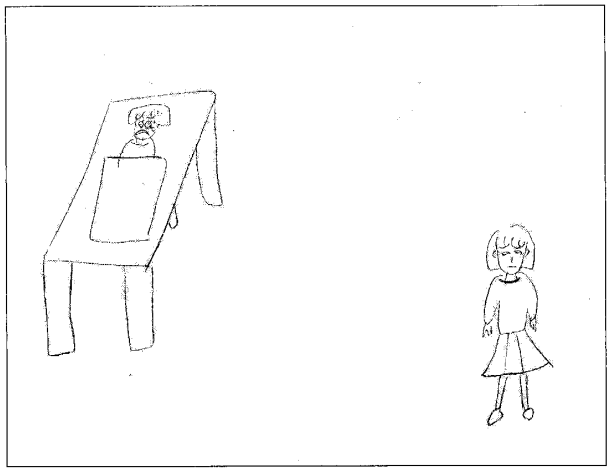

図6

現病歴：小学校高学年より被注察感。それ以降、不登校や妄想気分がみられるようになる。月経周期に一致して不安定な状態が見られ、その際に特に母親と衝突することが多い。

母子画（図6）：

Fは、まずベッドを描き、そこに赤ちゃんを描く。最初は、目を閉じてすやすやと眠っている表情を描いたのだが、消しゴムで消し、「やっぱり泣いているところ」と言い、描き直す。結果、ひどくむずかった赤ちゃんになる。次にそこから離れた位置に母親を描く。母親も最初は、目を閉じ、悲しい表情をしたものを描いたのだが、それを修正して顔にいろいろと描き足した結果、赤ちゃんをにらみつけるような表情になってしまう。

せっかくすやすやと眠っていた赤ちゃんは、口をへの字に歪めて泣き出してしまった。Fも、心穏やかでいられないし、穏やかであったとしても、それはそう長くは続かないのかもしれない。あるいは、穏やかで安らかな状態というのは憎まれ、攻撃の対象となるのかもしれない。それは外に向けられるだけではなく、内的な世界でも繰り広げられているのかもしれない。そのため、Fは満たされるということがなく、満たされたもしてもすぐに欲求不満に陥り、その結果怒りでいっぱいになるのではないかと考えられる。しかも、母親は迷惑そうな表情で遠い位置に、傍観者的に描かれており、F自身もそして周囲の何者も彼女の苦しみや怒りを理解することはなく、緩和することはできないと考えているかもしれない。同時に周囲は彼女の扱いに困っており、持て余しているのだと体験しているようであり、描画時も母親との関係悪化により入院中だったのだが、その入院に関しても、母親がFの扱いに困った結果として体験されているとも予想できる。不満や怒りでいっぱいの赤ちゃん、それをうまく扱えない母親。この絵に描かれたものが実際に外界で幾度となく繰り返されている。F自身も自分の怒りや不満に困惑しており、自ら穏やかな状態を壊してしまう側面があるということもこの描画は物語っているかもしれない。

4．考察

(1)母子画の解釈について―転移・逆転移の観点から―

以上、いくつかの事例を提示してきたが、母子画の解釈について触れておきたいと思う。母子画を解釈する際には、冒頭で示したように、背景に精神分析的な思考が存在する。Gillespieも描画の解釈に際して転移-逆転移を重視しているように、その描画からどのような印象を受けるのか、どのような感情が検査者に伝わってくるのかという、つまり検査者（Therapyで用いる場合であれば、Therapist）側の逆転移を精査していくことも解釈に際して重要なポイントとなってくると考えられる。例えば、事例1では、Aは「やさしいお母さん」と述べているのに相対して、筆者は「何かおそろしいことが起こっている」と怖い気持ちにさせられた。そういった筆者の中に呼び起こされた「おそろしい」という感情が、Aの母子画を解釈する際に重要な位置を占めていた。また、事例6においても、筆者は、Fが絵を描いている最中に、安らかな感じが壊されるようなイライラ感や冷たさや欲求不満感などを駆り立てられた。これらも、ある程度はFが、ふだん体験している感情の一側面を表しているとも考えられ、Fの心を理解するのに、事例1と同じく重要な位置を占めていたと思う。あるいは、これもGillespieが指摘していたが、描かれた母子画に、検査状況を患者がどのように体験していたかの側面が含まれているとも考えられるかもしれない。事例1では検査状況が侵入的でおそろしいと体験されていることを知らせているようにも思えるし、

事例５でも検査者である筆者が何か疑わしい「偽」のような存在として感じられていた可能性は充分存在する。このように、全ての事例に通じて言えることとして、母子画を解釈する際には、検査者側が自らの感情に敏感になっておく必要があるし、転移-逆転移の観点を取り入れることで、解釈の幅が広がることと、患者が治療者や病棟スタッフを始めとした人間関係の中で、どのような感情を体験しやすいのかということやどのような関係を取ろうとしていくかを予測することができるのではないかと考えられる。

(2)統合失調症患者の母子画に投影される＜母子＞の特徴

冒頭で述べたように、母子画には、個々人の心の中に存在している母子ユニットの一側面が投影されるのではないかと考えられる。これまで、事例で示してきたように、精神病患者の描く赤ん坊は、泣いていたり、怯えていたり、怒りを表している（事例１、事例３、事例４、事例５、事例６）。そして、そのような赤ん坊を母親はうまく抱えることができずにいる。本来なら、赤ん坊の考えられないものについて考え、そしてその赤ん坊の心を育むはずの母親が事例１や事例５のように脅かす存在となっていたり、事例６のように遠くから赤ん坊を疎んでいるように描かれている。唯一、事例３では、泣いている赤ん坊を何とかなだめようとしている母親の存在を窺い知ることができる程度となっている。それは、おそらく事例３のCは、非定型精神病であり、他の患者に比べ、まだ健康な部分も有しているからであるとも考えられるだろう。ただ、ここで提示した絵から伝わってくるのは、脅威、怒り、不満、排除されるなどといったものであり、安心、安全、落ち着きなどといった本来母親が子どもに提供するものとは異質なものが表現されている。したがって、この６事例を通して見えてくるのは、＜子＞の不安や不満感について充分考えることのできる＜母＞の欠如であるともいえ、そのような存在を統合失調症者たちは必要としている面があるのかもしれない。

(3)今後の課題

統合失調症患者の母子画を提示し、そこから彼らが母子画に投影する＜母子＞をみてきたが、ここで提示したのは６事例であり、一般化してしまうことはできない。同じ統合失調症患者でも、比較的入院期間が短い患者の中には、より安心感を感じさせるような母子画を描くものがいることも事実である。したがって、今後は数量的な比較を含めた、健常者との比較や他疾患との比較、あるいは統合失調症の病型による比較などをおこない、さらなる検討を深めていきたいと考える。

引用文献・参考文献

Bion, W. R. (1988) *Attacks on linking. Melanie Klein Today Volume1.*

ジレスピー. J （2001）（松下恵美子、石川　元訳）　母子画の臨床応用　金剛出版

平井正三（2002）　乳幼児の世界　現代のエスプリ「母子臨床再考」; 61-71

松木邦裕編（2004）　オールアバウト「メラニー・クライン」